

第7回高等教育推進センターFD講演会 講演「デジタルネイティブ世代への教育方法を考える —様々なツールを活用したアクティブラーニング—」

日 時：2016年11月11日(金) 17:10～18:50

場 所：関西学院大学上ヶ原キャンパス 関西学院会館 翼の間

開 会 の 辞

平 林 孝 裕（関西学院大学 高等教育推進センター長）

本日はFD講演会「デジタルネイティブ世代への教育方法を考える—様々なツールを活用したアクティブラーニング—」にご参集いただき、感謝しております。

私ごとからなりますが、10年ほど前、研究のため海外で1年間過ごすことがあり単身赴任のため、家族との連絡方法を考えなければいけないことがありました。メールとスカイプで連絡をとるという形で整えていきましたが、私の妻は、スマートフォンなどはあまり使わないため、当時小学校4年生の息子にそれらの最低限の使い方を教えて単身赴任をしました。1年経って帰国すると、息子はWindowsの基本操作を自分で習得して、自分にとっての当たり前前の道具として操っていました。

恐らく、このような状況は私の息子ばかりでなく、今の大学生にとっては、大差ないものと思います。さらに将来、私たちの学校に入学してくる学生は、スマートフォンやタブレットを当たり前前の生活環境、また学習環境として持っていた学生となり、そういったデジタルネイティブ世代の学生を迎える今後の大学教育を、どのように私たちはイメージすればいいのでしょうか。

今、大学を語るキーワードとして、アクティブラーニングが語られます。そして、それを効果的に推進する環境ツールとして、ICTの活用が議論されていますが、さらなる大学の教育の充実を図るにしても、今のそのような大学生の状況を考えずに、大学教育のこれからのあり方を私たちは論じることができないと思います。しかしながら、そういった現況に対して、大学の教員がどれだけ自覚を持って取り組んでいるかということに関しては、自分自身を振り返ってみても、甚だ心もとないところがあります。

そのような問題意識から、昨年度から大学教育に関するテーマで講演会を開いて、今回はその2回目となっております。今年は、講師に村上正行先生をお迎えいたしました。先生のご専門は教育工学で、現在、京都外国語大学マルチメディア教育研究センター教授として高等教育におけるICTの活用、またFDを研究されております。

デジタルネイティブ世代の教育のあり方について、その世代の特徴を理解しながら、どのよう

にアクティブラーニング、また大学教育全般を進めることができるのか、またどういったところに気をつけると効果的になるのか、お話しただけと思っています。

講演「デジタルネイティブ世代への教育方法を考える —様々なツールを活用したアクティブラーニング—

村 上 正 行（京都外国語大学マルチメディア教育研究センター教授）

京都外国語大学のマルチメディア教育研究センターで教員をしております、村上と申します。日本教育工学会を中心に、教育システム情報学会や人工知能学会、大学教育学会などに所属して活動しており、本学では主に情報系の講義を担当しています。

今日は、デジタルネイティブ世代への教育方法を考えるということで、前半は今の学生のことや気質についてお話し、後半はアクティブラーニングとソーシャルメディアについて解説した上で、twitterを使った授業実践について紹介したいと思います。

1. はじめに —「最近の若者」について—

まず初めに、「最近の若者」についてお話しします。

「最近の若者はだめだ」とは昔から言われています。「特に今の若者はひどい、まず当事者意識が完全に欠如している、さらにひとり立ちをしようとせず、常に何かに依存し、消費し、批判するだけのお客様で位置づけようとしている。これはゆゆしき事態であり、日本の社会のあり方にかかわる重大な問題である。最近の若者は定職につかたがらない。あるいは、会社に入っても一定のポジションで身を立てようとしなない。なぜなら社会的なかわりを全て暫定的、一時的なもののみなしているからだ。彼らに言わせると、本当の自分は別のところにあり、現実の自分は仮



村上 正行氏

の姿に過ぎないのだそうだ。本当の自分は棚上げしておいて、いつまでも立場を変え、考えを変え、自分自身をも変身させる余地を残しておく。一貫した主義、主張を持たないか、持たないふりをする。特定の党派、集団に全てをかけることを避けようとする。その結果、今の若者は全ての価値観から離れ、自分という価値観に従って生きようとする。これは、ヒッピースタイルに代表されるジーンズや長髪などの外見や容貌の主義、仕掛けなどといった態度に如実にあらわれている。若者は、いつまでもまじめに取り組むことができず、目の前の事情に利那的に、遊び的なかわりしか関与することができない。」とあります。

さて、最初の話だけを見ると最近の若者はだめだといっている点に共感しますが、後半にヒッピーが出てきて、少し違

和感を覚えたのではないのでしょうか。これは、小此木啓吾先生の『モラトリアム人間の時代』という1978年の文章です。最近の若者はだめだ、という言説は、40年前でもそうであるように、いつの時代でも言われていることです。本日は、皆様と、最近の学生と教育方法について考えてみたいと思います。

2. デジタルネイティブ世代について

2.1 デジタルネイティブ世代の育った時代背景

デジタルネイティブ世代とは、大体1990年生まれ以降を指します。アラン・ケイというパソコンの父と呼ばれている人によれば「テクノロジーは発明される前に生まれた人にとってのみテクノロジーとして意識されます」と言われています。

1996年生まれの大学3年生が育ってきた環境を例に、テクノロジーの変遷についてお話します。例えば私が小学生の頃、テレビで見たいアニメがあるのに、習い事に行かされ、見られなかったことが日常でした。しかし、デジタルネイティブ世代にはそれがわかりません。なぜなら、録画ができることが当たり前だからです。私が小学生のころはまだビデオがなかった、ということが全く伝わらないのです。ポケベルの話を授業でした際には、20分ぐらい使い方を説明した後、学生に「メールしたらいいやん」と言われました。「メールがないからポケベルを使っていたんだ」という話を、またしなければなりません。

2004年のミクシィも今の学生にはあまり伝わりません。2005年にはYouTubeが始まり、2006年はニコニコ動画がスタートします。ネットで動画を見ることは、小学生の頃からやっていた今

- 96 誕生 ヤフー株式会社設立・ポケモン発売
- 97 1歳 まぐまぐメルマガブーム
- 98 2歳 ウィンドウズ98が発売
- 99 幼稚園年少 i-modeが登場
- 00 幼稚園年中 カメラ付きケータイが発売
- 01 幼稚園年長 Yahoo! BB開始
- 02 小学1年 Winnyが誕生 P2P全盛に
- 03 小学2年 ブログサービスが展開
- 04 小学3年 ミクシィがスタート
- 05 小学4年 YouTubeスタート
ライブドアがフジテレビ株式取得。

- 06 小学5年 ニコニコ動画スタート
- 07 小学6年 ウィンドウズ Vistaが発売
- 08 中学1年 サブプライム崩壊大不況へ
- 09 中学2年 iPhone新型発売
- 10 中学3年 twitterが流行
- 11 高校1年 Facebookが流行
- 12 高校2年 LINEが流行
- 13 高校3年 炎上騒動が一般化
- 14 大学1年 YouTuberが人気に
- 15 大学2年 Instagramなどの写真アプリが人気
- 16 大学3年

ーデジタルネイティブじゃない1989年生まれのわたしの話
<http://d.hatena.ne.jp/haruna26/20110216/1297867931>

の学生にとっては自然なことなのです。2009年には iPhone が発売され、twitter や LINE が流行し、炎上が話題になります。そして2014年には YouTuber が人気になります。2016年、とある学校の小学4年生の将来の夢で第3位は、YouTuber だそうです。

携帯電話は、今では中学生で半分以上、もしくはそれよりも多くの子供たちが使っていると思います。また現在、高校生の6割がスマートフォンで勉強をするそうです。教育関連の企業からスマートフォン専用の勉強アプリが出され、それを個人の学習で使っているという話は聞いていましたが、最近では学校で導入して使用している例も増えてきているようで、かなり驚きました。スマートフォンで英単語を覚えるアプリなどを活用する傾向にあります。さらに、テレビをあまり見ずにスマートフォンの方が見ている時間が長いこと、家族との連絡は LINE でするなどといった話もよく聞きます。

携帯電話の普及率は2011年で1億3,200万台と、日本の人口より多く、固定電話は減る一方です。例えば、30年近く放送されているアニメを見るとわかりますが、電話は玄関にあります。このことから、電話はもともと、家と外、家と家をつないでいたことがわかります。その後、徐々に親子電話ができたり、留守番電話ができたり、携帯電話ができたりして、少しずつ家の中に入っていく、今では電話やネットは完全に個人に属するものになっています。個人の携帯電話でも、もはや電話番号は交換せず、LINE の ID を交換して終わりになってしまっています。

2.2 ネットリテラシーとデジタルネイティブ世代

ネットリテラシーの観点からみると、携帯電話を使うときにはリビングで使うというルールを決めるなどしないと、お子さんの交友関係がわからないことが多いのではないのでしょうか。昔は、家に電話をかけてくる子が、自分の子供の仲のいい友達だと家族にはわかったのですが、今の生活では家に電話がかかってくるきませんので気をつけてあげないといけません。また、子供にとっても友達の家に電話をかける機会がありませんから、友達の親が電話に出るという状況には減多に合わないのではないのでしょうか。つまり、異世代とのコミュニケーションの割合が随分減っているということです。このようなメディアが普及することによって、特定の人、世代とのみ付き合うことが多くなります。70年代生まれの私にとって、パソコン通信やインターネットの黎明期では、ネットは同じ趣味を持つ知らない人と付き合えるということが主なイメージです。しかし、今の若者にとっては、ネットは、基本的には対面で知っている人とのコミュニケーションに加え、有名人とのコミュニケーションをとるための手段となります。確かにソーシャルメディアを介した出会い系サイトのような事件は起こり、話題になりますが、問題の数としては少なく、多くの場合は対面の友達とのトラブルがソーシャルメディア上で生じています。

先日何かの記事で、親御さんは子供の twitter を頻繁にチェックしているという記事がありました。学校の先生もチェックしているようです。我々はネットでは知らない人たちとつき合う可能性があることを意識していますが、学生は知り合いとしかコミュニケーションをとっていないと思っており、知らない人が見ているという意識が少ないことが問題です。基本的に個人間での連絡ツールである LINE でも、スクリーンショットをした画面を twitter 上に掲載すれば誰でも見ることができます。だから、そういうことに気をつけましょうという話を授業の一環で行っています。

立命館大学 「SNS 利用にあたって知って もらいたい5つのこと」

- <http://www.ritsumeai.ac.jp/rs/sns/>
- 1. SNS 上の情報は、必ずしも正しいものばかりではない
- 2. SNS 上においても、社会的ルールを守らなければならない
- 3. SNS 上の情報は、世界中に広まるものである
- 4. SNS では、匿名であったとしても、責任が伴う発言として取り扱われる
- 5. SNS での不用意な発言は、家族や友人にまで被害がおよぶことがある

立命館大学では、「SNS 利用にあたって、知っておいてもらいたい5つのこと」というサイトで注意喚起が行われています。このようなことを意識してもらおうということは、とても重要なことで、大学生に限らず中学生、高校生、大人でも気をつけないといけません。このような注意喚起は多くの大学で行われており、明治大学では就職活動を例にした漫画を発行しています。ある会社の面接で嫌なことを言われた、あの会社の面接官は最悪だなどといったことを書いてはいけないという内容です。

3. 「今」の大学に求められていること

京都大学の溝上先生は、「現代は、いまの大人たちが生きてきた時代とはあまりにも違う」と仰っています。どの時代でも若者は大人からそう言われていたわけですから、「教育者や大人は、目前にいる学生の生き方を、一度色眼鏡を外して見る努力をし、その上で彼らに必要な教育一般を考えていく必要があるだろう」と言っています。したがって大人は自分が学生だったときのことも思い出す必要もありますが、生きてきた時代背景が違うため、その点を踏まえておく必要があります。一方で、大学の状況も変わってきています。現在の日本は18歳の50%以上が高等教育に進学しているユニバーサル段階で、進学率も恐らく20年前に大学へ入学した層と、今入学してきた層では少し変化があると思われます。大学の状況、若者という18歳の生きてきた状況も違いますし、同じ大学に勤めている方は、入学してくる層が随分変わってきたと感ぜられるでしょう。

現在、大学の存在意義が問われています。質的転換答申と呼ばれている文部科学省の中央教育審議会の2012年8月の答申で、このような文章が出されています。我々に生涯学び続ける能力はあるのかと、突きつけられているわけでもあります。

学士課程においては、主体的な学びを行う必要があります、学習時間を確保しなければなりません。単位の実質化の問題では、1コマの授業で2単位を付与するために、2時間の予習と2時間の復習が必要です。こういう課題があるので、アクティブラーニングや、PBL（プロジェクト・ベースト・ラーニング、もしくはプロブレム・ベースト・ラーニング）、反転授業、ラーニングコモンズなどがキーワードになってきています。

今の大学生を考える

- ・ 溝上慎一(2004)「現代大学生論
～ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる」

現代は、いまの大人たちが生きてきた時代とはあまりにも違う... 教育者や大人は、目前にいる学生の生き方を一度色眼鏡を外して見る努力をし、その上で彼らに必要な教育一般を考えていく必要があるだろう

アクティブラーニングには様々な定義がありますが、溝上先生の定義を用いると、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという受動的な学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと」を指します。ここで言う能動的な学習とは、書く、話す、発表する等、活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴います。活動的に書いたり話したりして、個人の学習に関与していきましょうということです。そもそもラーニングにおけるアクティブ、パッシブラーニングの違いは何なのでしょう。学習していれば、それはすでに活動的だといった話はもちろんありますので、これはなかなか割り切った定義だと思っていただければと思います。このような前提を踏まえると、ポイントは、教えるから学ぶへのパラダイム転換、教育・学習のパラダイム転換であるということになります。

もちろん大学教員は授業目標に応じて、講義形式をとる場合がよいこともあります。講義というのは昔から使われているわけですから、有効なケースもたくさんありますので、全部アクティ

文部科学省中教審答申 質的転換答申(2012年8月)

このような時代にあって、若者や学生の「生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を育成することが、大学教育の直面する大きな目標となる。

このような学士課程教育の質的転換の前提として、学生に、授業時間にとどまらず授業のための事前の準備や事後の展開などの主体的な学びに要する時間を含め、十分な総学修時間の確保を促すことが重要である。

ブラーニングにしたらいというわけではありません。ただ講義をするだけでいいというわけではなく、授業形態に合わせて、役割を考えていく必要があるということです。したがって、アクティブラーニングを授業で絶対用いないといけないうわけではなく、場合によって小テストやペアワークを取り入れるなど学生が主体的に取り組む時間を作りましょうということです。

4. アクティブラーニングにおける注意点

アクティブラーニングの授業を行う上では、それぞれの役割の変化も重要ですし、授業設計をきちんと考える必要があります。グループワークをやる上でも、どのような活動をデザインするか、知識をどのように与え、どのような問いや課題を作成するかを、しっかり考えてやらなければいけません。どのような達成目標で達成するためにどう活動すればよいのか、アクティブラーニング型授業のための評価も必要です。

例えば、東京大学では平成27年度に、授業時間が90分から105分の13回実施に変更になりました。そこで、15分増えた分をどうすればよいかというときのためのティップス集のような冊子が作成されました。中には、ピア・レビュー、相互教授法、ミニッツペーパーなど、90分授業から15分プラスするときに、どのようなことをすればよいかの実践例が書かれています。

また、授業設計が重要と言われていますが、大学の教員になるときに授業設計の方法は習わないため、最近ではプレFDといって、京都大学や東北大学など国立大学を中心に、大学院生向けに大学教員になるための授業方法を教えようといった取り組みをしている大学もあります。単純に講義では話さえすればいいというものではないということ意識していただけたらと思います。

5. LMS (Learning Management System) について

多くの大学で導入されているLMSですが、「高等教育機関等におけるICTの利活用による調査研究」という研究を行っているグループによると、実際はあまり使われていないというデータもあります。アナログでやるよりもシステム上に課題をあげたほうが便利となる場合などありますが、LMSは日常性が重要ですので、普段から利用してもらうように工夫しなければなりません。

京都外国語大学では今、多くの学生がパソコンをあまり使わず、困っています。関西学院大学でも同じではないでしょうか。スマートフォンで入力する方が速かったり、Wordなどのソフトの使い方やメールの送り方などがわからない学生がいることが問題になっています。情報を教える立場からすると、プログラミングのおもしろさを教えることや、またスマートフォン上にはそもそもフォルダとかファイルという概念がないですから、ファイル構造を教えるのにも随分苦労しています。

しかし、大学にいる限り、パソコンは日常的に使わないといけません。パソコンを使わない多くの学生にとっては、パスワードなども入力する習慣がありませんので、きっと情報系科目を担当している先生方は、学生が1年生のころにパスワードどう覚えさせ、変えさせるかといった問題を抱えているのではないのでしょうか。またLINEしか見ないため、大学のアドレスからメールで回答を送っても見ないといった問題も多いです。悩ましいことですが、これはどこの大学でも

同じ状況だと思います。このような状況だからこそ、LMSは学生にとっての使いやすさを考えることを念頭に、様々な形で、日常的に使えるような存在にならなければならない。また、教員もそのようなことを考えて授業を行う必要があるということです。ログインをすることがまず面倒な学生には、一度ログインされると、IDとパスワードを保存することができる、といった情報を、自然に伝えるような文脈が授業で必要です。

例えば、ITパスポート試験の対策授業では、パワーポイントの授業資料をPDFでLMSにアップしています。LMSにアップすることで授業資料をあげているので何らかの理由で欠席しても大丈夫ですとか、授業中に行う小テストの練習問題を掲載しているので授業の振り返りのために解いておきましょうといった使い方です。普段からログインする習慣を作るように使わなければ、なかなか学生に見てもらえません。

また、フィードバックを返すことも重要です。学生は、ミニツツペーパーやレポートを提出した後、点数以外のコメントが返ってこないところに不満があるようです。レポートの一部をピックアップアップして、先週こんなコメントがありましたと授業で触れるだけでも、紹介されるために頑張らなくていいという気持ちになるようです。これはLMSだけでなく紙媒体でも同じことですが、このような動機づけを高めることも必要です。

6. 授業における twitter の利用について

6.1 授業で利用した際の効果

最後に授業における twitter 利用についてご紹介します。7年ほど授業で利用していますが、活用する意義は2点あります。1点目は、他の学生の意見を知ることができる点です。発題をした後にリアルタイムでレスポンスができるクリッカーでは、一般的に手元の端末で回答しても他の学生の意見は把握できませんが、twitterのハッシュタグ機能を用いることで、授業に関するツイートを一覧することが可能です。2点目として、リプライやリツイートを通じて、学生同士の交流も可能です。最近ではNHKのニュースでも、ツイートしたものが画面に表示される番組がありますが、他人の思っていることを共有でき、また自分自身の意見が反映されることもあるため、参加意識を高める効果があります。

私は、2010年度から京都外国語大学の情報社会論という授業で、twitterを活用して学生の意見や感想を書いてもらうということを実践しています。twitterを使うことでノートを書くことを苦手とする学生にも対応できるようになったと思います。受講生は現在、100名から150名ほどおり、SNSやYouTube、Googleなどデジタル社会における様々なサービスについて紹介し、それらの特徴や社会への影響について解説する授業です。つまり、授業の目的の一つとして、ソーシャルメディアを理解するために実際に使ってみようではないかということで始めました。同時にこれらのソーシャルメディアを適切に使えるようになることも目的として意識しています。

実際に授業でtwitterを活用していく上でのポイントとしては、まず内容をまとめる学生の存在が重要です。私が話した内容をまとめてくれたり、授業で紹介している内容に関するサイトのURL等を書いてくれたりする学生がいると、他の学生の理解が進み、コメントを書き込みやすくなるからです。2点目として、多く発言する学生を準備することも大切です。しかも最初のコメントにいいことを書く学生ではなく、しょうもないことも書ける学生を準備することが重要

twitterを活用した授業デザイン

- 授業中のtwitter上の書き込み・議論を盛り上げるために、下記の点に注意して実践した
 - 授業の最初にtwitterの説明を行う
 - 授業の内容をまとめる学生を準備する
 - 多く発言する学生を準備する
 - プライバシーについて配慮する
 - 授業の内容をまとめて提示する

30

で、このことによって発言の敷居が低くなり、誰もが参加しやすい雰囲気を作ることができます。また、プライバシーに配慮するために授業用のアカウントを作って自由に発言してもらうことや、最後に授業の内容をまとめて提示するなどすることも議論を盛り上げるために継続的に使っていくために効果的です。このようにクリッカーなどの専用のシステムだけでなく、社会に提供されている一般的なサービスを使っても授業が行えます。学生からは「他人の発言を見ることができておもしろかった」、「授業の内容をまとめてくれる人がいてよかった」等と感想があり、こちらが意図した通りに授業は無事進みました。授業中に発言することが苦手でも、「twitter上では、気軽な感じで自由に発言できてよかった」という学生もいます。「先生にコメントを捨ててもらえて嬉しかった」という意見もありました。

6.2 情報の発信に対するハードル

2010年における受講生のtwitterの利用率は21%でしたが、今では90%に達しています。しかし、実際に発信するのは1日に1回か2回程度という学生が過半数で、多くの学生は自身の心境を吐くことよりも友達の投稿を見るだけということが多いようです。彼らが普段使っている他のソーシャルメディアについても受信するだけの利用が多くなってきており、友達と一緒に芸能人のSNSを見て楽しんでいるけれども、自分たちでは投稿しないという傾向になってきています。それは結局、発信することについてハードルを高く感じているからだと考えられ、ツイートしたいけれど、この内容で嫌われないかなどと考えてなかなか発信できないという面があります。

また、授業用にアカウントをつくる学生が増えました。普段のアカウントは鍵をかけている学生が多いからです。鍵は一部の人しか投稿内容を見られないようするなど、プライベートの内容を保護するためのものです。もともとこの授業を始めたときは、普段使いのアカウントで参加してもらい、同じ授業を受けている人たち同士で多くの人とつながってもらえればと思っていたのですが、同じ授業を受けている者同士でも、知らない人はつながらなくていいと考えているようです。したがって、授業用のtwitterアカウントを作れば、私的な発信はしないため鍵をかけずに気軽に質問ができたり、発言した学生は授業に参加した気分になれるため発言をししてくれま

す。ただ、質問などがモニターに映し出されたらうれしい人もいれば、映し出されたくない人もいますので、この加減は難しいと感じています。

情報の受信が中心になってきていることと、人間関係も知っている人たちだけで交流しがちな時代ではありますので、私はこのような授業が少しでも役に立てばいいなと思います。ネットを使う、使わないに限りませんが、このような授業は記憶に残ることもありますので、できる限り工夫していきたいと思っています。twitter を使った授業を始めて7年になりますが、今でも学生は新しい感じがするとコメントを書いてくれます。多くはありませんが、いろいろな大学でこのような取り組みをしている方がいるのですが、京都外国語大学の他の授業ではこのようなことはされていないでしょう。もちろん、これはあくまで一例ですし、twitter を使ったほうがいい、というわけではありません。私は目的があって twitter を使っていますが、こういうことで使うことができますという事例を紹介させていただきました。

例えば関西学院大学で導入されている LMS である LUNA の掲示板を使えば、ユーザ認証がありますから、クローズドな世界ですので安全ですし、そこでやりとりをすることもできます。それをリアルタイムや授業時間外に、感想を書いて次の授業までに提出しなさいと言ってあげる。もちろん、それらも授業内容や達成目標に応じて使うことが何より大切です。私の場合は、情報系の授業では twitter などのソーシャルメディアも使いますが、数学の授業など計算やスキルを習得するタイプの科目であれば、授業が終わってから LMS を使う、反転学習的に授業前にちゃんと読んでくるように仕向ける、などといった使い方もしています。そうするための色々なツールが今、紙でも ICT でもありますので、実際に学生に学んでほしいという目標に応じたもので、どのようにそれぞれのツールが使えるかということを考えていただくことがよいのではないかと思います。

7. まとめ

今の学生が私たちと同じ感覚を持つことはありませんが、今の学生は今の学生なりに、努力しています。今の学生のことを理解しようとしても、完全には無理ですが、時代や文化を踏まえて「そういうものだ」と認識することが大事だと思います。大学ですから、学問の重要性を知ってもらい、社会で生きていくための力を身につけてもらうことを目的に授業をしていくことが大事だと思います。

以上を、まとめにかえて、講演を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。